

チェルノブイリに思いをよせて

ポレーシエ

ブルシーロフ病院の新病棟、一部完成！！

医療機器・医薬品などの救援を行っているジトール州ブルシーロフ病院の、再建中の病棟が一部完成しています。その写真を入手しましたので、ご紹介しましょう。

旧病棟は、約 100 年前のもので、「おばけが住んでいる…？」とうわさされるような状態。

設備も老朽化して、使い物にならなかったも



のが多かったのですが、きれいに、明るく生まれ変わりました。患者

さんは、汚染地ナロジチ地区などからの移住者が多いのですが、困難な生活が続く中で、明るい救いの話題となっています。

しかしながら、資金難でまだ一部分のみの完成です。早い日の、全部の完成が待たれます。



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

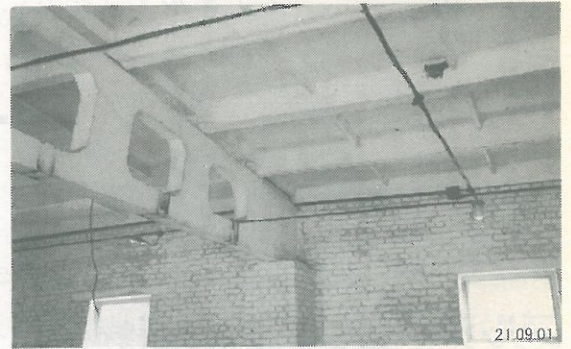
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.com

サナトリウム附属養鶏場予定地 見学の記

南箕輪村：原 富男



<養豚場として使われていた煉瓦作りの建物>



<保温力が期待できる厚い壁>



<建設計画について説明を受ける>



<魚を養殖できそうな池>

1000万円の寄付金をまとめた形で、しかも現地の人々の経済的自立、雇用の場拡大を目指したプロジェクトを選定する作業が、いよいよ最終段階に入りました。スタディ・ツアーの宿泊場所がデネシ・サナトリウムということもあり、現地から提案されていた「養鶏場計画」予定地を見に行きました。

予定地はサナトリウムから車で10分ほどの距離にありました。総面積3ヘクタール(9075坪)の農場には、昔コルホーズの養豚場として使われていたという、煉瓦作りの建物が2棟ありました。ここで5000羽の鶏を飼い、州立の放射線保護治療・保養センターであるデネシ・サナトリウムの患者が食べる卵と肉を提供したいとのこと。

また、それによる収益でサナトリウム利用料を安くし、被災者の保養の機会を増やすことを目的とするプロジェクトです。

センター長の話によれば、この建物を修理して内部を立体鶏舎にするそうで、壁の厚みが45センチ以上のこの建物なら、冬の寒さで鶏が凍える心配はないでしょう。

平飼いではないのが唯一不満ですが、効率から考えれば仕方がないと思いました。予定では、農地として使用可能な2.5ヘクタールに燕麦・キビ・小麦などを栽培し、総収穫量5トンを生産し、養鶏に必要な飼料の一部としたいとのこと。建物の修理、鶏舎・飼料生産用のトラクター・粉碎機・混合機をはじめ、常時10名の職員給料など経費もかかりますが、計画が軌道に乗れば素敵な事業になります。

農場には300坪以上の池もあります。この池で捕れた魚や手作りの炭を鶏に食べさせたらよかろうと思いました。

全通東海 スタディー・ツアー報告会

荻谷 政宏

私が所属している郵政職員の労働組合、全通信労働組合東海地方本部（以下全通東海）は、今年で創立50周年を迎えました。その区切りの記念行事として国際貢献を柱にし、今回名古屋NGOセンターの協力を得て、8団体のスタディー・ツアーに組合員17人が参加しました。参加したスタディー・ツアーは、オヴァ・ママの会（スリランカ）2名、ICAN（フィリピン）2名、キャンヘルプタイランド（タイ）3名、タランガ・フレンドシップ・グループ（スリランカ）2名、フィリピン情報センター（フィリピン）1名、ニカラグアの会（ニカラグア）3名、チェルノブイリ救援・中部（ウクライナ）2名、名古屋NGOセンター（タイ）2名、です。

全スタディー・ツアーが終了した去る10月20日に、全通東海報告会が開かれました。多くのツアーは、今までの援助先の訪問、救援物資や救援金の使われ方などを見学・確認する趣旨が強いようでした。その中でも、キャンヘルプタイランドは、ツアーの目的の一つに労働力の提供があるようで、参加者が実際にタイの現場で、数日にわたり建設作業に参加した体験を発表しました。体を動かし、自分たちの成果を残してきた気持ちが十分に伝わってきました。

それぞれのスタディー・ツアーの感想を聞いて、私が参加したチェルQはとても恵まれていたと思います。その一つがサナトリウムの宿泊でした。あれだけ現地の人々、言葉、匂い？に囲まれて数日間生活を送ったツアーはないようです。これは本当に貴重な体験。

今回の全通東海の取り組みは、やや試験的な意味合いもありましたが、一様に参加者全員に実りが感じられ、来年以降も積極的に参加していきたいとの意向が示されました。もしかすると再度、全通東海からお邪魔するかも知れません。その時はどうぞよろしくお願いいたします。

ナロジチで
智慧の奥・リンゴを
ほうばる。
10月20日



(写真&コメントは白井次郎さん)

スタディ・ツアーに対する現地新聞記事紹介

世界を結ぶ思いやりの心 コリヤ・ズィマ記者

『若いジトームル』紙（ウクライナ統一社会民主党ジトームル支部発行）

2001年9月27日号掲載

写真の展示は2段に分かれていた——偶然かもしれないし、日本人の几帳面さから配慮された対比なのかもしれない。上段には異国情緒あふれる華やかな日本の祝日、下段には——広島と長崎の恐ろしい悲劇の白黒写真がかけられていた。古い真実が新たに確認されたのだ——苦しみを体験した人だけが、隣人の苦労を理解できるという……。 (中略)



ばに掲げ、子ども達が元気で幸せに育つことを願うのだ。 (中略)

ウクライナで最も印象に残ったのはどんなことかという質問に対し、日本人たちが異口同音に語ったのは、ウクライナでは暖かい人情が大切にされている、ということだった。そして、日本とウクライナがたとえ遠く離れていても、「思いやり」という言葉は同じように理解されているのだ。

人の苦しみに無縁なものはない アンナ・ルィプスカ記者

『ジトームル地方』紙 2001年9月26日号掲載

(前略) ジトームル市「英雄消防士」通りに立つ「世界を守った消防士たち」の記念碑は、チェルノブイリ原発事故の結果被災した内務局職員たちのボランティア団体と、ジトームル州消防局との発案によって、無料奉仕で建てられたものである。ここで9月19日、日本の慈善団体「チェルノブイリ救援・中部」のメンバーによる献花が行われた。同団体は、1991年からウクライナの事故処理作業協会に医薬品・新しい放射能検知器・車椅子などの人道支援を行い、資金を提供している。

チェルノブイリ事故のもたらした諸問題を深く理解して、日本の友人たちは毎年ウクライナを訪れている。今回の客人たちの中には、「救援・中部」事務局長・河田昌東氏、代表・大谷早苗氏ほか、チェルノブイリの悲惨に無関心でいられない10人近くのツーリストが含まれていた。彼らは将来同団体の積極的なメンバーとなるために、ウクライナとその抱える諸問題をよりよく知る機会に恵まれたのだ。

日本の客人たちはジトームル州内務局長ペトロ・グロジンスキー氏、消防局長レオニード・

アントニーク氏及び消防局職員たちと会見した。チェルノブイリの原子炉を地獄の炎から救って自らの命を犠牲にした人々を思い起こしつつ、彼らの名が刻まれたプレートの前で日本の客人たちは祈りを奉げた。

9月20日には客人たちはナロジチに行き、博物館を訪問し、いくつかの問題を解決した。宿泊先のデニシでは、9月23日に「日本の日」が催され、日本の歴史・習慣・その現在の紹介が行われた。州立小児病院の訪問もあった。

広島と長崎の恐ろしい原爆投下を記憶している日本人にとって、チェルノブイリ原発事故の事故処理作業員たちを援助し、彼らと協力することは、彼らの勇気と偉業に敬意を表することである。そして「チェルノブイリ救援・中部」とそのメンバーたちが、今後もわがジトームルの英雄たちを支援しようとしていることは、彼らが「人の苦しみに無縁なものはない」という事実を心に刻んでいる事を再度、立証してくれているのである。

日本人たちの新たな訪問

『ナロジチの社会・政治週刊誌・四方の知らせ』紙 2001年9月28日掲載

(前略)『ポレーシェ』という名の通信はもう何年も発行されている。発行を始めたのは「救援・中部」のメンバーたちであり、この通信は日の出づる国の人々に我が国のニュースを伝えている。善意の人々が我々を救援しようと努力し、我々の心痛や不安——チェルノブイリ惨事のもたらす——に気を配ってくれているのはうれしいことだ。

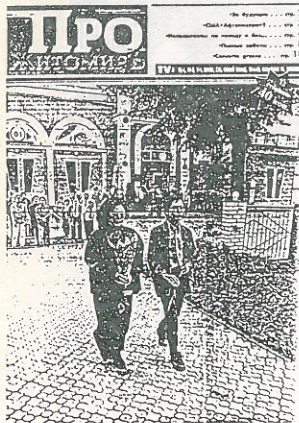
よりよい関係を保つため、日本人たちは「ウクライナ講座」を始め、その一環としてウクライナ訪問も行われている。(後略)

オイソガシトコロ!

『指標6+1』紙 2001年10月4日号掲載

自らの多忙をかえりみず、友人を訪ねる時間を作ってくれた人への感謝の言葉は、日本語でこのようになる。移住基金運営委員会のメンバーが最近ジトームルを訪れた日本の慈善団体「チェルノブイリ救援・中部」の代表団との別れに際して述べたのもこの言葉だった。(中略)

多くの人が初めて日本を発見したのだった。今後日本に対する関心はぐっと深まるに違いない。客人たちは催しの組織への協力と自分たちに寄せられた暖かい気持ちに感謝した。次回の



訪問は来年2月であるが、これは純粋に公式的な訪問となる。

今年すでに行われた援助に興味のある方のために、その総額を記すだけの価値はあるだろう。——70万4,000グリヴナ(注:約1600万円)である。その内訳は医療機器・医薬品・粉ミルクである。

日本語の感謝の言葉は「ドウモ アリガトウ」または「アリガトウゴザイマス」だが、その意味は「本当にありがとう」または「とても感謝しています」である。

別れにあたって我々がお互いに述べたのもこれらの言葉だった。

(本誌記者)

いよいよ大詰め ウクライナ講座

スタディ・ツアーから帰ってきて3週間、そろそろウクライナが恋しくなりだした10月20日(土)、名古屋市教育館において第5回ウクライナ講座「スタディ・ツアー報告会」が開催されました。ウクライナという国に関心のある方、原発事故後のチェルノブイリの住人達を心配している方など、様々な想いを胸に抱いている方が参加してくださいました。スタ・ツア参加者達は、ナロジチのこと、交流会のこと、子ども達のことなど、思い出に浸りながらたっぷり報告してくれました。

壁にはツアー参加者が撮影した約50枚の写真を飾り、いながらにして気分はジトミルに戻ったようでした。

今回のスタディ・ツアーで一番良かったこととして、多くの参加者が「サナトリウムでの子ども達との交流」を挙げました。代表団訪問や従来スタディ・ツアーとは違い、被災者との交流にこれほど多くの時間を取れたことは、今後の支援から考えても非常に意義深かったことと思われます。

さて、**次回のウクライナ講座はお待ちかねのお料理です。**講師には、愛知県安城市在住の中島ナジェージュダさんをお迎えします。ウクライナ料理は、ロシア料理と似て非なるもので、同じボルシチでも、ロシアのものよりさっぱりしていて、日本人の味覚に非常に合います。また、ウクライナ料理は彩りがとても美しく、見ているだけでも楽しいのです。その中から今回は、代表的な国民的料理、**ボルシチと、プリンチキ(挽き肉入りクレープ)**を、お教えします。今年のクリスマスのメニューに、ぜひとも加えてみてください。皆さまの参加を心よりお待ちしております。



目で楽しませてくれる
ウクライナ料理の数々

- ◆日 時：12月15日(土) 午後1時～4時
- ◆場 所：東生涯学習センター(地下鉄「新栄」下車。芸創センターとなり)
- TEL 052-932-4881
- ◆参加費：1500円(材料費を含みます)
- ◆定 員：30名・予約制(12月10日までに事務局にお申し込みください)

(市原)

《私のはじめの一步》

11月24日(土)に、伏見の名古屋市ボランティア情報センターで「ボランティア活動入門講座」が開催されました。「おもちゃ図書館ぴっころ」・「身体障害者授産施設むつみグリーンハウス」とともに「チェルノブイリ救援・中部」もゲスト出演することになり、私と神野英樹さんが参加しました。

ボランティア初心者、もしくは未経験者の方たちに、ちょっとだけ先輩の私達ゲストが自分の「はじめの一步」はどうだったのかを語り、参考にしてもらおうという主旨の会でした。

講座には、およそ40の方が参加されており、「先輩」たちは、数年前から十数年前を振り返り、それぞれに自分の「きっかけ」を語りました。皆に共通していたのは、ボランティアを始めようと意気込んでの「一步」ではなく、なにげなく始めたことが今につながっているということでした。そして神野さんの「時間が合うこと・場所が近いこと・自分のしたいことをすることが、長続きの秘訣」という話は、非常に説得力がありました。

「救援・中部」としては、「きっかけとしてぜひクリスマスカードを！」とPRもしてきました。ポレーシェ読者の皆さんも、ぜひ「はじめの一步」を踏み出してみてください。頭で考えているよりも意外と簡単ですよ。(市原)



車椅子キャンペーン

終了ま近(12月末)!!
まだ16万円・・・

2001年夏からのキャンペーンですが、ただ今、16万円(約4台分)と中古数台にとどまっています。まだ、目標の20台(90万円)に、ほど遠い状況です。皆様の一層のご支援をお願いしなければなりません。

日本と違って、ウクライナでは障害者用の施設はなく、彼らは自宅内の限られたスペースでのみしか、生活できません。まだまだ、弱者に対する配慮や保障が確立できるほどの経済状態ではありません。チェルノブイリ事故によって障害者になってしまった人、生まれながらに障害を背負ってきた生命に、ぜひ皆様の思いと、カンパを届けたいと思います。

使われなくなった車椅子で、まだ充分使用できるものであれば、中古でもかまいません。できれば、メンテナンス済みのもののほうがありがたいのですが、もしできない場合でも、事務所までご一報ください。

特集!! 『救援物資は今!』

(医療機器稼働状況 アンケート結果)

神野美知江

ポレーシェ64号・7Pに掲載した、「医療機器に関するアンケート」を覚えていますか? アンケートは、移住基金によって8月下旬に実施・回収され、ウクライナ在住の竹内さんによって翻訳されたあと、救援・中部へ郵送されて来ました。

なんと、回収率100%!

アンケート結果を集計し、分析しましたので、以下に報告します。

このアンケートにより、私達の贈った(とどけ鳥のステッカー付き)医療機器は、広大なウクライナのどこにあるのか、その所在が改めて明確になりました。移住基金代表のキリチャンスキー氏は、正確な管理リストを作成し、厳密なチェックを行っていたのです。私達のパートナーは、責任感をもって仕事をしているのだと改めて感激しました。

下の表は、アンケートの回答例(州立小児病院分の一部)です。このようなアンケートの回答が、のべ24ヶ所すべてから回収されました。

(州立小児病院の回答抜粋)

↓(次ページ参照)

施設・病院名	供与年	援助物資名	メーカー	数量	バル	アンケートのコメント
州立小児病院	1991	顕微鏡・中古		1	A-2	'99修理した。
州立小児病院	1992	空気清浄器	コニエクト	1	A-1	
州立小児病院	1992	超音波診断器用印刷機	アカ社	1	A-1	
州立小児病院	1994	保育機(V-850)	アム	1	A-1	
州立小児病院	1996	新生児用保育器(V1)	エプソール社	1	A-2	'98と'00に計3台修理した。1台は市立小児病院の麻酔器と交換した。
州立小児病院	1996	新生児用保育器(V1)	エプソール社	1	A-2	
州立小児病院	1996	新生児用保育器(V1)	エプソール社	1	A-2	
州立小児病院	1996	新生児用保育器(V1)	エプソール社	1	A-1	
州立小児病院	1996	外科手術用麻酔器(Sulla808)	ドレゲル社	1	A-1	市立小児病院から移動。
州立小児病院	1996	血中酸素濃度計(N-180)		1	A-2	'00に修理した。

私達は、医療施設への支援の一環として、'91～'01の11年間に、のべ98台の医療機器を贈ってきました。しかし、郵政省の交付金や一般の支援者からのカンパの減少に伴い、しだいに新品を贈ることが困難となりました。そこで、2年前から臨床工学技士の北野さん達の力を借りて、医療機器のメンテナンスにも力を入れるようになりました。必然的に、今まで贈った医療機器の稼働状況の徹底的な調査が必要であると考え、アンケートを実施したわけです。

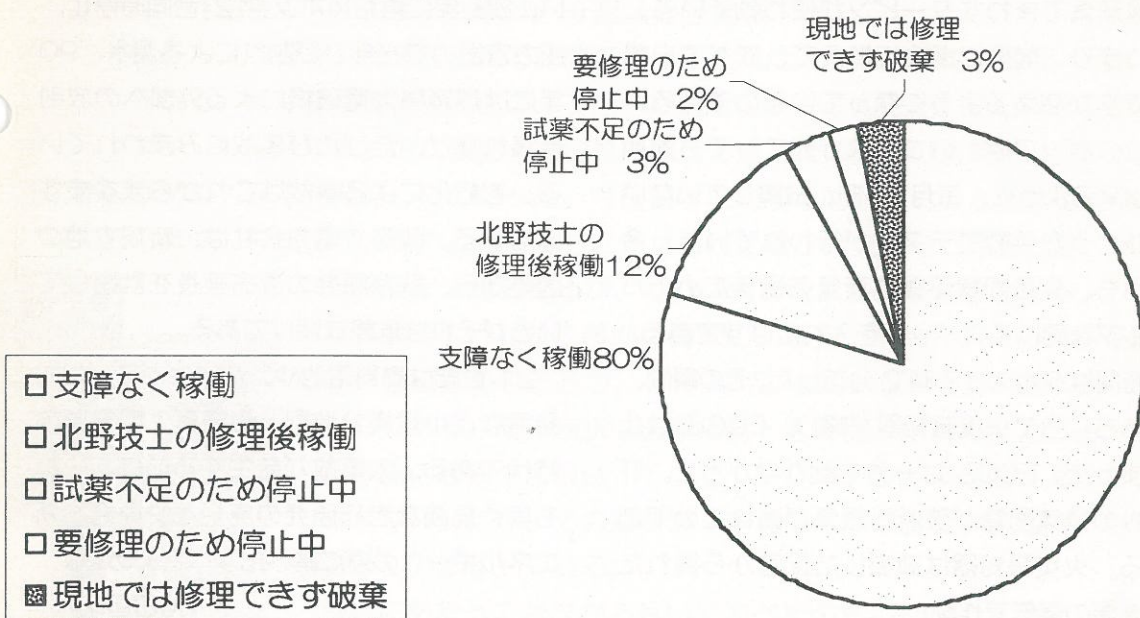
稼働状況のレベルは、「A-1：支障なく稼働」「A-2：北野技士の修理後稼働」「B-1：試薬不足のため停止中」「B-2：要修理のため停止中」「C：現地では修理できず破棄」の5段階に区分されました。

'00. 2月以降に北野技士が現地に行き、メンテナンスを行った12件を含め、90台（92%）が稼働していることがわかったのです。

修理できず破棄されたのはわずか3台（3%）、試薬が無いために停止中が3台、修理部品の無いものが2台の合わせて5台（5%）が停止中でした。今後、この5台についてもメンテナンスを行うことにより、稼働できるように活動を進めていきます。

「アンケート回収率100%」「稼働中の医療機器92%」は、予想以上に現地で管理され、医療機器が効果的に活用されていることを示しています。

2001.08.実施 医療機器稼働状況 アンケート結果



11月7日、中部電力浜岡原発一号炉で起きた事故は、幸い外部への放射能漏れがなかったものの、工学的には原発安全上の大事件である。何故なら、地震などで配管がこわれ、炉心の水が失われれば、原子炉の空焚きによる「炉心溶融」につながるため、最後の手段として用意されている「緊急炉心冷却装置」(以下 ECCS) 自体が配管破断により機能しなくなった、という事故だからである。その上、この事故の検査の中で、10日新たに压力容器と制御棒駆動機構の溶接部のひび割れによる、炉水もれが見つかった。東海地震が今にもありそう、という状況でのこの事故は、地震による原発大事故というシナリオが誇張ではなく現実性のあることを示した。

「緊急炉心冷却装置」のポンプは、事故や落雷で原発が緊急停止して発電が止まったり、外部からの送電が切れても良いように、モーターではなく原子炉で発生中の高温蒸気でまわすタービンが使われている。つまり、最悪の場合に備えて、すべて自前でまかなえるようになっているのである。このポンプは、いつ事故が起こっても対応出来るように、毎月1回、故障していないかどうか手動でテストが行われていた。今回も、先月同様係員は蒸気を通すためのバルブを開けるスイッチを入れたはずである。時間は夕方方の17時2分だった。その瞬間、あちこちで火災報知器が鳴り、ECCSは止まった。ECCSは一分も動かなかった。肝心の蒸気配管が破断し蒸気が漏れたのである。火災報知器は破断した配管から漏れた高温の蒸気で作動した。

しかも、この時、原子炉からの水漏れも

始まっていたのである。もし、压力容器のひび割れが拡大し本当に炉水が失われても、緊急炉心冷却装置は働かなかったのである。そうなればそのまま最悪の「メルトダウン：炉心溶融」に進んだはずである。数十分～2時間後くらいには、チェルノブイリを上回る災害に日本は見まわっていただろう。富士山の噴火のように放射能が撒き散らされる様子は想像するだけでも背筋が寒くなる。我々とチェルノブイリの間には紙一重の差しかなかったのだ。

破断した配管は直径15センチ、厚さが1センチの炭素鋼である。こんな頑丈なパイプの瞬時破断は考えられない。破断前に何らかの前兆があったはずだが、定期点検の対象にはなっていなかった。また、88年にこの原子炉では、今回とそっくりの炉水漏れ事故を起こしたがその教訓は生かされなかった。

浜岡原発一号炉は1976年運転開始以来、88年に再循環ポンプ2台同時停止、压力容器の溶接部ひび割れによる漏水、90年には燃料棒大量破損による外部への放射能漏れなど、たびたび事故にみまわれている。老朽化による事故はこれからますます増加する。政府や電力会社は、新規立地の困難から、既存原発の寿命延長を計画しているがそれは危険な賭けである。

21世紀は燃料電池や、バイオガス、風力発電など小規模分散型、資源再生型電源の時代である。大事故が発生する前に、一刻も早く危険な老朽原発の廃炉と脱原発・新エネルギーへの道に踏み出すべきである。

(河田昌東)

竹内さんのウクライナ便り

キエフ駐在 竹内 高明

Konnichiwa, Kiev no Takeuchi desu (こんにちは
キエフの竹内です).

Yatto hikkosi-saki ga kimarimasita (や
っと引越し先が決まりました). Ima no apart
no sugu soba desu (今のアパートのすぐそ
ばです). 9-ka ni hikkoshimasu (9日に引
越します).

【インターネット・カフェからのメール11月5日付け】



ニーナさんの家で

左から、神野 竹内 ニーナ ワレンチン

<11月14-15日>

○医療機器アンケートの件

デネシ (サナトリウム) からの書面回答は、移住基金から郵送されてきました。すべて稼働中というものです。訳を加え郵送します。

○私のヴィザの件

11月13日のキリチャンスキー氏からの電話では、人道支援委員会が「竹内に無料で人道支援目的ヴィザを出すように」という書類を在日本ウクライナ大使館にすでに送り、コピーを氏に送ってきたそうです。「私は解決不可能の問題を解決するのがすきなんだ」と満足げに語っていました。

○私は9日無事に引っ越しました (五代君と金子君の助けを借りて)。「ジュノーの会」が支援しているプリピャチからの疎開者のクラブのメンバーで、不動産あっせん業を営んでいる人の紹介です。家賃は110ドル/月で、これまでの130ドル/月より安くなりました (その分面積も少しだけ狭いですが、台所とバス・トイレに一部屋というつくり、バルコニーは台所についている)。一応一年の契約です。外国人でもあるし、まあ様子を見ようということでしょう。

○ウクライナの政界は、来年3月の最高議会選挙 (比例代表区と選挙区の議席が半々。新しい選挙法が最近成立した) にむけての政党間の派閥形成、2002年度予算書の審議が、主な話題です (2001年度予算の収入は、国営企業私有化によるそれが、見積もりの59億グリブナから現実の25億グリブナに大きく減少したため、減っている。しかし蔵相ミチューコフによれば、一方で外債返却額が交渉により減少し、また所得税収入が予定よりも増加したため、赤字増は5~6億グリブナに抑えられるという)。

○クチマ大統領の月給は「5,000グリブナ (約940ドル) 以下」、プーチン大統領は500ドル、ベラルーシのルカシェンコ大統領200~300ドル。 (<「四方の知らせ」紙 (2001.9.28)>)

○河田さんの講演は、趣旨をそのままにインタビュー形式に変えて、新聞に載ったそうです。キエフは日中の気温が6~7度くらい、雪はまだ降りません。でも風は冷たいです。


NPO 法人チェルノブイリ救援・中部の 2001 年度上半期会計報告

(2001.4.1～2001.9.30)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
救援寄付金	3,423,250	事業費	8,210,602
(内訳) 個人(252件)	2,479,026	(内訳) 医療関係支援事業(医薬品提供)	1,590,000
団体(7件)	944,224	医療関係支援事業(医療機器提供)	3,400,000
運営費関連寄付金	3,874,000	保険事業費	0
(内訳) 個人(70件)	361,000	被災者団体等支援事業費	1,950,000
団体(3件)	3,513,000	特別事業費	0
国際ボランティア貯金交付金	2,648,000	奨学金事業費	0
外務省ODA補助金	3,899,732	現地派遣事業費	890
民間助成金	100,000	現地パートナー支援事業費	0
物品売上等	97,950	業務委託費	620,375
預金利子等	8,831	駐在員費	118,700
未払金清算差額	103,340	輸送費	0
		文通・クリスマスカード事業費	0
		国内事業費(機関紙発行)	530,637
		管理費	1,869,009
		(内訳) 役員報酬	330,000
		人件費	380,965
		通信費	362,119
		印刷製本費	27,428
		旅費交通費	168,300
		会議費	19,772
		支払利息	22
		消耗什器備品費	191,940
		消耗品費	37,387
		機器賃借料	0
		修繕費	0
		事務所費	268,299
		支払手数料	40,580
		広告宣伝費	5,100
		諸謝金	3,903
		団体会費	30,000
		租税公課	0
		為替差損・通貨両替手数料	0
		雑費	3,189
		使途不明金	5
		当期支払い合計	10,079,611
当期収入合計	14,155,103	当期収支差額	4,075,492
前期繰越	18,292,175	次期繰越収支差額	22,367,667
収入総額	32,447,278	支出総額	32,447,278

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2001年11月18日 監査人

南和也 

ふりいとおく

チェルノブイリの 子ども達の写真展

—クリスマスカードをつくろう—

山根 田鶴子

一生懸命、カードをつくる子どもが「病気の子どもは何人いるの？これだけでたりるの？」と心配そうに聞いてきます。図書館の視聴覚室をかりて写真展を開き、そこでついでにクリスマスカードをつくっていた時の事です。

11月10日～17日までの1週間で、200枚は軽く超えるカードができました。ガールスカウトのメンバーをはじめ、親子づれでカードづくりをやってくれました。

“言ってくれれば手伝ったのに”“来年は声をかけて”“1年を通して少しずつ布袋を縫ってその中にカードを入れたら喜ぶかじら？”との声に、心が温かくなりました。図書館の方々はパネルのセットも手伝ってくれ、コピー代は無料と、本当に協力して下さいました。図書館ボランティアの主婦の方々も仕事をおくらせてつくって下さり、児童クラブ（NPO子育て支援どろん子）ではカードの材料を購入してつくってくれ、児童クラブのボランティアの方が写真をみせながら説明すると、子ども達から質問せめにあったとの事でした。

ウクライナ語のメッセージをうつしながら“私達の生き方や生活はこのままでいいだろうか”フツともれる会話に誰でも“このままでいい”なんて思っていない。でも何をしたいのかわからないのが現実。大きなことは

できないけれど、カードづくりをさせていただきながら、チェルノブイリの子ども達にちょっとは喜んでもらえるかな、と小さな期待をこめてすごした1週間でした。



事務局便り

チェル救の皆様、初めまして。佐保克彦と申します。

このたび9月で事務局を辞められた松田さんの後任として主に会計を担当することとなりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最近ある人に誘われてパン教室に通ったりケーキを作ったりしています。もともとケーキは作って見たかったのですが、パン作りにはほとんど関心はありませんでした。が、作ってみると意外な発見がありました。ケーキと違って酵母菌を発酵させて膨らませるので、作っているとどうしても酵母菌を育てている気分になってしまうんです（最後に焼くときに菌はみんな死んでしまうのですが…合掌）。単に機械的に作っているという感じと一味違う気分が面白いですよ。

それとひとつお知らせをいたします。皆様にはいつも貴重なご寄付をいただきありがとうございます。そのご寄付に対する領収書についてですが、10月の運営委員会で領収書の要・不要を明記していない方には領収書を発行しないこととしました。といいますのも、なかには領収書のような郵便物が届くと家族に知られて困るという方もみえるためです。ですので、領収書が必要な方、何か返信が来ないと物足りない方は振込用紙の通信欄の「領収書 要」に丸を打ってくださるようお願いします。

では皆様、多分ウクライナの人々がチェル救を必要としなくなるまで何らかの形でかかわらせていただくことになると思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



クリスマスカード&ミルクキャンペーン

ジトーミルの子ども達は、日本人との交流、異文化とのふれあいを心の底から望んでいます。クリスマスカードは、背負っているものがあまりにも重い彼らの、心の救いです。日本語でも、絵だけでも構いません。ジトーミルの子ども達は日本の友人達の心のこもったカードを心待ちにしています。

カードは12月14日（金）必着です。カードは、封筒に入れ封はしないで、さらにひとまわり大きい封筒に入れてお送りください。あわせてミルクキャンペーンも行っています。

ぜひともよろしく願いいたします。

編集後記

☆「この事故は、老朽化が原因ではないのか？」と報道陣が詰問した。

即座に、「寿命は40年。まだ、浜岡1号は25年しか経っていない。老朽化ではない。」と中電。

私達は、「寿命が40年という事自体、うそだったんでしょ!!」と言っているのだ。(J)

☆近所に、時々私の帰りを待っていたかのように、たたずんでいる猫がいる。ところが最近、日暮れが早いせいか、見かけない。猫嫌いの私だけれど、ちょっぴり淋しいものだ。(佳)

☆アフガン難民の救援活動をやろうとする人達に、複雑な政治の壁が。多くの犠牲者を出すテロ、多くの難民を生む戦争…せまり来る厳しい冬に、せめて暖かい毛布とくつ下を。(京)

☆原発は、海の自然も山の自然も奪い去る。しかし、海山町の住民の良識が、その美しい名前を守ってくれた。次は、一番エネルギーを浪費している私達が、彼らを守る番なんだよね…。(美)